中・高校生の「親性（おやせい）」を育む

伊藤　葉子

「親になること」をとらえ直す

最近、親子関係をめぐる深刻な問題状況から、親になる前の段階から「親になるための資質」を育むことが大切ではないかという意見をよく聞く。ただし、保育学を含む関連の学問領域においては、親になるずっと前のやっと「子ども」から抜け出たばかりの段階である中・高校生の「親になるための資質」の育成には、これまであまり目をむけられてこなかった。

実際には、学校教育という場で、戦後この役割を担ってきたのは家庭科の保育教育である。ただし、男女が共に家庭科を学ぶようになる前は、女子だけを対象にした母親準備教育として、結婚して子どもを生むという女性の生き方を前提として「母性」の育成が目標に掲げられ

てきた。しかし、多様な生き方が認められるようになった今、中・高校生に対し、「親になること」が人間のあるべき生き方だよといって、保育を教えることが難しくなってきている。また、子育ては母親の役目とされていたけど、これからは、子育てにおいては、父親・母親が協力することが大切だと話す時に、父親は父性で母親は母性なのか、それとも父性的・母性的な要素を父親も母親も備えなくてはならないのか、そもそもどのような要素が父性または母性なのかということで、教師の方に戸惑いが見られる。ましてや、現代の中・高校生は、それぞれの親との葛藤の中で暮らしているのであり、自分が親になることは遠い将来のことだと思っており、親役割のことを話してもピンとこない。つまり、中・高校生に「親になるための資質」を育むことの重要性をわかっているが、どのような資質を育んでいくのかということは、ここで、しっかりと考え直さなくてはならない時期にきているのである。これは家庭科の保育教育だけの課題ではなく、関係領域全てにとっても重大な課題だと考える。

ここでは、この課題について、「親性」という視点から意見を述べていきたい。紙面の都合上、なぜ「親性」という用語を使うのか、そして、どのように「親性」を育んでいくのかの二点を中心に書くことにする。

「親性（おやせい）」って何？

「親性」という用語[1]が最初に使われた背景を探ると、いわゆる子育ては母親の役目とする伝統的母性観から脱けだそうという動きのなかで、生まれてきている。つまり、母性に関する議論が、父性・母性をめぐる議論へと発展するなかで、両性が備えるべき資質を強調した用語だととらえられる。もともと、父性と母性という用語をめぐる議論は、それが父性という機能・母性という異なった機能を持つ前提（二元的）のもとで繰り広げられてきている。対して、「親性」という用語を用いることは、親の役割を果たすことにおいて、父性・母性という異なる機能を考えることはしないということになる。こ

の意味において、育児性・養護性という用語も同様の特徴を持っていると言えるだろう。

ただし、親として両性が備えるべき統合された資質として「親性」を提示するだけでは、どのような資質を育成していくべきかという課題に応えたことにはならない。もう少し具体的に、「親性」について私なりの考えを述べていきたい。

「育児性」という用語は、子どもを生み育てることは男女両性の広義の養育欲求・養育行動として把握されるべきだという主張のもとに提唱された[2]。「養護性」は、養育にあたる人間に限らず、相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能と定義されており[3]、これは子どもであっても備えていくべきだとも論じられている。言いかえれば、「育児性」は「性別」からの脱却を、「養護性」は「血縁」「世代」からの脱却を図った用語だととらえられる。この「性別」「血縁」「世代」というキーワードでみていくならば、私は「親性」は、「性別」「血縁」からの脱却を図るが、「世代」という枠組みをもつべきではないかと考えている。つまり、男女という「性別」や、自分の子どもに限定される「血縁」にしばられるものではないが、次世代を育成する社会の一員としての自覚と責任（「世代」）に基づいた資質だという考え方である。

まとめると、「親性」を「次世代の再生産と育成のための資質」ととらえ、この資質には、親としての役割を果たすための資質だけではなく、親とならない場合であっても、次世代の誕生と健やかな発達を支援する社会の一員としての備えていくべき資質も含まれるというのが私の考えである。

さらに「親性準備性」って何？

このような考え方に基づいて、私は、さらに「親性準備性」という用語を提示したい。これは、私が中・高校生の保育教育を専門としている立場から、親性の育成を目指した上で、目の前にいる中・高校生にはどのような資質を育むのかという点を明確にすることが必要だから

である。この準備性という用語は、親自身が発達する存在なのだという理論の延長線上に生まれてきている。なぜならば、発達する存在として親をとらえることによって、その資質の形成過程としての「準備性」という視点を生み出すことにつながったからである。

ここで、親性準備性という用語は、すでに述べたような「親性」の形成過程において、段階的に形成される資質と定義することにする。教育というのは実践的な営みである。何を目標とするのかを明らかにした上で、それでは、今の目の前にいる生徒たちには、そのために何をしていけばよいのかをみつけていかなくてはならない。だから、「親性」という指標と、今の中・高校生の発達段階にあった「準備性」のどちらも大切ではないかと考えた末に、その二つを単純につなげた「親性準備性」を提示するという結論に達した。

中・高校生の時期に育むべきことは？

話が前後するが、「親性」とは、必ずしも親になることを前提としないという点について、もう少し説明を加えたい。というのは、教育的見地からみると誤解を招くかもしれないからである。少子化が進む中で、社会全体として出産率をあげていくべきであり、子どもを生み、育てることの意義を伝えていくことは保育教育に期待された重要な役目でもあるだろう。しかし、その役目を果たすということは、親になる生き方を人間のあるべき生き方として、刷り込むことなのだろうか。私は、中・高校生一人一人が、多様な考え方や価値観に触れる中で、自分の生き方を模索する過程において、彼ら・彼女らが親になることを自ら選び取っていくことを支援することが保育教育の役目だと考えている。同時に、たとえ、親にならないという生き方を選んだとしても、次世代の子どもたちの誕生と健全な発達を支援する保育環境をつ

くっていくのは社会全体の責任であることを知り、自分も親世代の一員としての責任を果たしていかなくてはならないということを学んでいけるような保育教育でなくてはならないとも思う。

家庭科の保育教育は、良妻賢母教育の一貫として結婚―出産という女性の固定的生き方を刷り込むような教育をしてきたという歴史的背景をもっている。そして、今、少子化が進み、その教育的対策として、家庭科の保育教育への期待が高まっていることに、私は喜びも感じているが、出産率をあげるための手立てに終わってしまってはいけないという思いも強い。

最近、中・高校の家庭科の先生方と保育教育に関する話をする機会が多いが、先生方から共通に出てくる言葉は、「生徒たちは将来のことをまだ具体的に考えられない、特に中学生では難しい。なぜ、今、保育を学ぶのかを説明できない」「今の生徒たちの中には、複雑な家庭事情を抱えている子も多い。自分の親への反発も強い。それなのに、あなた方が子育てをするときに……ということで話を進めてもしらけてしまう」などである。

つまり、私がこれまで述べてきた「親性」「親性準備性」のとらえ方は、まさにそのような生徒たちと中・高校の保育教育の現実から出てきたものなのである。そして、それ故に、中・高校生の発達段階においては、「今、現在、他の人に対する受容性と思いやりを備えた個人であるための資質」の育成が重要であると思う。この「他の人」とは、実際には「子ども」ということになるのだが、「子ども」を通して、他者全般への受容性と思いやりを育んでいくという視点もつこと、その上で親性の育成を目指すことが大切だと思う。このような視点こそが、なぜ、中・高校生の時期に保育を学ぶのかという疑問への答えとなるだろう。

中・高校生と子どもとの触れ合い体験の意義は？

それでは、どのようにして中・高校生に「子どもへの受容性と思いやり」を育むのかということになる。その具体的な取り組みの一つとして、ここでは、子どもと

中・高校生との触れ合い体験（保育体験学習）について紹介する。

子どもとの触れ合い体験が子どもへの興味を高めること、その後の保育学習への意欲が増すことは、すでに数多くの実践報告から明らかにされているが、ここでは、もう少し詳しく子どもと触れ合うことの意義について考えてみたい。

まずは「小さい子について知る」ことである。幼稚園や保育所にいくことを話すと、中には「いきたくない」「子どもはきらい」という生徒もいる。理由を聞くと、「うるさいから」「めんどくさいから」という。日頃、小さい子と触れ合う機会が少ない中・高校生は、自分たちの生活と距離のある子どもたちの姿に対して、ある意味では間違ったイメージをもっていると考えられる。「うるさいから」といったある生徒は電車の中ではしゃぐ子どもをみたり、泣き叫ぶ子どもとすれ違うなどの場面の積み重ねによってイメージを形成したようだ。その生徒は、体験後「よく考えてみたら小さい子のことよく知らなかった」と語っていた。

また、体験前には「子どもが好き」「かわいい」といっていた生徒の中で、「子どものめんどうをみるのはたいへんだと思った」と話す生徒も少なくない。これをマイナスの変化だととらえるよりも、漠然とした観念的なイメージから脱する一歩だと考えるべきであろう。この「知る」ことは、異年代の子どもの発達段階を個々の体験から感じることでもある。

次に挙げたいのは「自分を知ること」である。触れ合い体験後に、生徒たちの感想に「自分の○○を思い出した」「なつかしかった」などの表現が見られる。人間は誰しも、突然、時間軸をさかのぼって、ある時期の自分の姿を思い出すことがある。時には、ある瞬間の自分の行動そのものが鮮明に浮かび上がることもあるかもしれ

ない。中・高校生という時期は、自分がどんな存在であるのかを模索する時期である。この模索においては、現在の自分のことだけに終始するのではなく、時間軸の中で自分をとらえ直すことが必要である。現在、何かを研究する時に、生涯発達的に考えていく傾向が強くなっているが、まさに、自分がどこからきて、どこへいくのかを探る中で、自分がどんな存在かをとらえ直すことが重要なのである。

子どもとの「関係性」のなかで
新しい自分と出会わせる

「子どもを知る」そして、子どもを通して「自分を知る」ことは、生徒たちにどのような変化をもたらすのだろうか？　触れ合い体験前には、子どもや触れ合い体験に対して否定的であった生徒の中で、体験後に肯定的な変化を示す生徒も少なくない。彼ら・彼女らにインタビューを試みたところ、自分たちが子どもたちに受け入れられたという満足感を言葉に表していた。人間関係スキルの貧困さが問題視されているが、中学・高校での仲間関係に悩んでいたり、孤立している生徒たちも少なくない。そのような生徒が「子どもに喜んでもらえた」と表現するとき、そこには他者に受け入れられたこと、他者の役に立ったことの嬉しさがにじみでている。言いかえれば、子どもという異世代との人間関係における自信の萌芽であり、新しい自分との出会いということになる。

私はこれを子どもとの関係性における有能感として、社会的自己効力感という視点から研究を進めてきた。この子どもに対する社会的自己効力感が高まり、他者との関係性における意欲的な姿勢へと発展していくことによって、右で述べた中・高校生における親性準備性としての「今、現在、他の人に対する受容性と思いやりを備えた個人であるための資質」の育成につながるのだと考える。

また、教師からみると、授業や休み時間などの学校生活以外の場面で、新しい生徒の一側面に触れる機会でもある。すなわち、生徒が子どもとの関わりという過程において新しい自分に出会うと同時に、教師も生徒をとらえ直す機会をもつ可能性があるということである。このような機会を生み出すためには、教師は生徒たちの個々の多様な体験の意味をみとる力がなければならない。子どもたちが遊んでいる側にすわって、その様子をみてくるだけの体験であっても、ひっそりと自分の小さいころのことを思い出したりしていることもある。教師がその体験を励ますことによって、その体験はより有意義なものとして価値づけされるだろう。そのためには、幼児教育に関わる方々の理解と支援が必要不可欠である。子どもとの関係性のなかで、生徒が新しい自分に出会えるように、また教師が新しい生徒に出会えるように、幼児教育に関わる方々に、是非、力を貸していただきたいと切に願っている。

（千葉大学）

参考文献

本論で述べられている「親性」「親性準備性」及び「保育体験学習（ここでは子どもとの触れ合い体験としている）」については以下の文献に詳述されている。

伊藤葉子「中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習の教育的効果の検討」博士学位論文、お茶の水女子大学、二〇〇三年

引用文献

1) 深谷和子「親（おや）性」とペアレンティング・昭和六三年度～平成三年度家庭教育研究セミナー報告書：子どもの社会化と「ペアレンティング」国立婦人教育会館、一九九二年、六七～八五頁

2) 大日向雅美「母性の研究」川島書店、一九八八年、六〇～六一頁

3) 小嶋秀夫「養護性の発達とその意味」小嶋秀夫（編）「乳幼児の社会的世界」有斐閣、一九八九年、一八七～二〇四頁